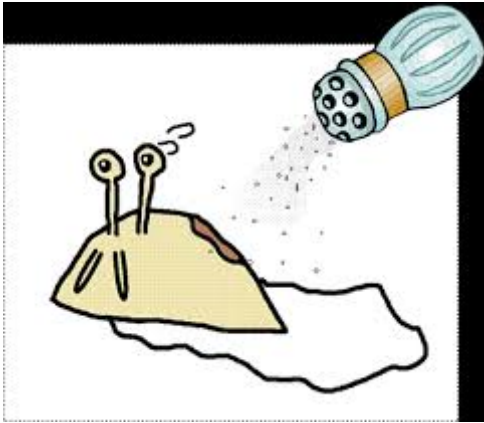


(最近、そうではないかと思ったこと その1)



親は、子のために思い、迷惑を掛けてはいけない、辛い思いをさせてはいけないと、荷をふったり肩代わりしたりします。

ところがその度が過ぎると、子は、人生は意外と楽だと思えるようになり、親は人生、結構辛いものだと思うようになります。せっかく親は子のためによかれと思って遣ってはいいるのですが、知らないうちにお互いの意識と認識に差が忍び込んできて、気がつくとき既に遅し、意思疎通がはかれない状態になっていることがままあることに最近気づきました。

子のためだけではなく、お互いのことを考えれば、敢えて堰き止めていた壁に風穴を開けて、子にも一定の負荷を持たせることも「あり」だろうし、大切なことなのだと思います。これは倫理とか愛情とかの問題や観点からと言うよりも、「浸透圧による濃度均等化」に範をとった科学と力学の観点からかもしれません。

もう少し分かりやすく言うと、濃度差があるものは、半透膜という一種の「風穴を開ける」ことで自然と同じ濃度になるよう変動が起き、その濃度差が解消しますよということです。その科学と力学に照らし合わせてみると親子の意思疎通の不具合は、お互いの濃度差によって生じているものではないか？

それを解消するには、肩代わりや背負い方が足りないと勘違いして、更にその上に不可逆になるよう強固な壁を作るよりも、お子さんには当初、多少は辛いでしょうが、風穴をあけることである程度「現実」を流し込み、濃度差を均等化してあげる方が、自分の過濃度、過飽和が薄まって軽くなることはもとより、長い目で見れば、今後のお子さんの適正濃度、言い換えれば程よい「充実」、更に今風の言い方を借りれば「リア充」のためにもいいのかもしれないですね？

と言うお話です。